

藤本ひとみ

預言者

Nostradamus, le prophète

ノストラダムス

上

Nostradamus, le prophète

Hitomi Fujimoto

預言者
ノストラダムス
蔵書章
江苏工业学院图书馆

藤本ひとみ

集英社



預言者ノストラダムス(上)

一九九八年十二月一〇日 第一刷発行

著者 藤本ひとみ

発行者 小島民雄

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一八〇五〇

編集部 (〇三) 三二三〇一六二〇〇

電話 販売部 (〇三) 三二三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三二三〇一六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 文勇堂製本工業株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

預言者ノストラダムス
(上)

目次

第一部 王妃カトリーヌの陰謀

第一章 密偵の帰還 8

第二章 ノストラダムス、最後の賭け 24

第三章 占星学者と女官遊撃隊 36

第四章 モンモランシー大元帥のいとも高貴なる晩餐 59

第五章 サロン・ドゥ・クロワの霹靂 77

第六章 金羊毛を捜す男 86

第二部 寵姫ディアヌの御世

第一章 君臨する愛妾 104

第二章 静かすぎる旅館 119

第三章 火刑台の煙 138

第三部 預言者ノストラダムスの秘密

第一章 神算鬼謀の宮廷 150

第二章 ブロワ城の待ち伏せ 173

第三章 一九九九年の預言 193

第四章 運命は、変えうるか 212

第五章 統治するには分割せよ 221

第六章 嵐の前 235

第四部 アンリ二世の悪夢

第一章 婚礼の毘 258

第二章 あのみ貌に幸いあれ 278

第三章 激化する対立 296

第四章 預言は、成就するか 316

第五章 時代が終わる 335

預言者ノストラダムス

(上)

装幀

カウベルデザイン

第一部 王妃カトリースの陰謀

第一章 密偵の帰還

1

「誠に、とんでもない食わせ者でございました、あのノストラダムスという男は」

六月にしては珍しく、朝から糸のような雨が降っていた。エクーアンの城は、北側に平原を見下ろす高台に建つ。喧騒のパリから馬車で三十分という距離であったが、四リユー半にわたって広がる庭園に囲まれ、西側から南側に広大な栗林をかかえて、城内は静まりかえっていた。鉄平石の飾り屋根を打つ雨の音が窓を震わせ、薪の取り払われた暖炉の空間に響くばかりである。

エクーアンの城主は、フランス大元帥にして最高司令官、同時にバステュー長官、ナント

を初めとする百三十余の城の主として国内に六百カ所の領地を有する大貴族アンヌ・ドゥ・モンモランシーであった。現フランス国王アンリ二世から尊父と仰がれている彼は、自分の居城のすべてに国王の居室を用意し、その扉の掛金を国王の頭文字、天井を国王の紋章で飾って、行幸に備えている。

昨年、完成をみたばかりのエクーアンの城において、アンリ二世の居室群は、北西の翼館にあった。階下は、当然のことながら王妃の居室群である。

その午後、アンリ二世は、プシユケの物語を描いた四十四枚のステンドグラスの飾られた西翼館の大広間で、各国大使との引見を終えた後、流行のトルマダム勝負をするために、モンモランシーと連れ立って三階の遊戯室に足を向けた。

それを見届けて王妃カトリーヌ・ドゥ・メデシスは、一階に通じる南翼館の螺旋階段を駆け降りたのである。待ちに待った側近アルベルト・ドゥ・ゴンディが来訪したとの知らせを昼食時に受け取り、以降、心ここにあらずであった。

階段を降りる時はいつも、呪うようになぞっている国王と自分の名前の組合せ文字を刻んだ支柱も、目に入らない。それでも足音を忍ばせ、衣擦れを消すために服の裾を高く持ち上げることは忘れなかった。アンリ二世の公式の愛妾であり、一五四八年からはヴァランチノワ公爵夫人とも呼ばれるようになったディアヌ・ドゥ・ポワティエの地獄耳をかわすためである。デ

イヌに知られることは、アンリ二世に知られることと同様であった。

多色大理石を敷きつめた中庭を突っ切り、モンモランシー家の紋章を掲げた北翼館の出入口に駆け込んで、カトリーヌは雨を払いながら王妃用の大広間に向かう。そこを通り抜け、螺旋階段のある狭い廊下に出れば、自分の居室は目の前であった。

「雨の中をご苦労でした」

言いながらカトリーヌは、自分の頭文字と金のアラバスク模様で覆われた扉を押し開く。エクーアン城特有の宗教画を描いた大きな暖炉の脇で、アルベルト・ドゥ・ゴンディがこちらを振り返った。西の窓から射し込むわずかな光が、よく日に焼けた精力的な微笑を照らし出す。生年三十四歳、まさに働きざかりであった。

「お健やかで何よりでございます」

アルベルトは、フィレンツェ生まれのカトリーヌが二十三年前、フランスに嫁いだ際に出仕した名門ゴンディ家の当主アントニオの長男である。武将として、さらに多くは密偵として、弟カルロと共に骨身を惜しまず働く最古参の部下の一人であった。

「帰りが遅くなりまして、申しわけございませんでした。アヴィニオンまでは、大変順調だったのです」

アルベルトは、旅行用の帽子を脱ぎながら歩み寄り、片膝を折ってカトリーヌの右手を押し

いただく。

「その先が、一步も動けないという有様でございました」

今回のアルベルトの仕事は、昨年五月にリヨンのマセ・ボンノム印刷所から、預言書なる本を出版してフランス中にその名を轟^{とどろ}かせたミシェル・ドゥ・ノストラダムスという人物の調査、及び情報の収集であった。

「なにしろ、かの人物の生まれたサン・レミ・ドゥ・プロヴァンスも、今の居住地サロン・ドゥ・クロワも、十歩も歩けば市外に出てしまいそうな小さな街で、私のようなよそ者が街道を通っただけで、もう充分に噂になるらしく、市門をくぐってからは、街の人々の視線が私の一挙手一投足まで監視しており、諜報活動を行う前に、こちらが諜報されてしまいかねない状況でございました」

カトリーヌは笑い出し、赤をふんだんに使ったボーヴェの綴^{つづれ}織の傍の椅子を指し示す。

「まあ、おかけなさい。ゆっくりうかがいましょう」

アルベルトは、手にしていた帽子で旅行用外套^{がいのとう}を払うと、拍車のついた長靴で、名工マセオ・アバケーヌの焼いたファイアンス陶器の床を無造作に踏み鳴らし、部屋を横切って赤いトルコ革の椅子に屈強な体をおさめた。

「それでやむなく大都市アヴィニオンまで戻り、その雑踏の中に身を潜めて、手足となつてく

れる者を捜し出し、遠隔操作で情報を集めたというわけです」

カトリーヌは、頷きながら部屋の中央に置かれた胡桃材の平置き書棚を振り返る。青いモロッコ革と金の板で装丁された翻訳本『トリスタン物語』や、白い子牛皮と薔薇色の金属板で飾られた昨年発行のピエール・ロンサールの『結婚』、天鵝絨に銀の掛金をつけたいく冊もの祈禱書の間に、薄く小さな本が立て掛けてあった。背表紙には、金色の小枝と葉があしらわれ、略字で『ノストラダムスの預言書』と書かれている。簡素な作りの茶色の本だった。

「その結果といえば、先ほどお伝え申し上げた通りでございます。ノストラダムスという人物は、はつきり申し上げて、信頼に足るものではないように思われました」

軍人らしいきっぱりとした結論を、カトリーヌは、微笑んで受け止める。いかに忠実な部下といえども、万事にわたって完璧なわけではない。命令権者としては、それに耐え、かつ必要なだけの情報を引き出して、最終的な判断を下さねばならなかった。

「具体的に聞かせてください」

やんわりと発せられた言葉の微妙な抑揚に、アルベルトは視線を上げる。カトリーヌの小さな唇には、なお微笑が浮かんでいたが、かすかな曲線を描いた細い眉の下の大きな目に、笑いはなかった。アルベルトは、自分の推論が王妃の氣に染まなかったことを推察し、身のすくむ思いで頭をたれた。

「申し上げます」

強くなった風が窓の外を吹き抜け、城の後方に広がる栗林から枝葉のざわめきを運ぶ。アルベルトは自分を落ち着けようとして、大きな呼吸を繰り返した。やはりカトリーンの命を受け、現在ミラノに飛んでいる側近ジュリオ・ドウ・ビラークよりも、劣る資質と思われるわけではなない。それは自分の屈辱であり、ゴンディの家名を貶めるものであった。

「ノストラダムスという人物の本名は、ミシェル・ドウ・ノートルダム。九人兄弟の長男です。父親は、アヴィニオン生まれのジョーム・ドウ・サン・ノートルダムで、商人兼金貸しでした。一四九五年五月十四日にレニエール・ドウ・サン・レミと結婚し、その翌日に、裕福な妻の実家で暮らすために、サン・レミ・ドウ・プロヴァンスに引っ越しています。一五〇三年十二月十四日、ミシェルが生まれる頃には、商売も順調で公証人にもなり、町の名士の一人といっても過言ではない状態でした」

カトリーンは、フランスに来てから懸命に学んだこの国の歴史を思い出す。一三〇五年から一三七七年まで、さらに教会大分裂の時代を通して、プロヴァンスのアヴィニオンには教皇庁が存在した。大分裂が公式に終幕を迎えるのは、一四一七年のことである。歴代の教皇たちは、アヴィニオンの教皇宮殿やグロゾー修道院、モントゥー城、また枢機卿の街といわれるヴィルヌーヴ等で、華麗な宮廷生活を繰り広げていたのだった。カトリーンは、それらに、自分の経

驗したローマ教皇庁の華やかさを重ねてみる。二年にも満たない期間ではあったが、聖職者たちの豪華な暮らしと、それを反映したローマの街の輝かしい繁栄ぶりは、忘れられない。

つまりアヴィニオンは、百年に近い間、ローマも同然であったのである。しかも一四八一年までは教皇の土地であり、地元の人々は、その影響下に置かれていた。特に商業にたずさわっている者にとって、教皇庁の存在は、無視できないものであったにちがいない。

その街で名士であつたという事実、さらに金貸し業も営んでいたということ、また聖堂の名前をそのまま借りてきたかのようなノートルダムという姓。これらを繋ぎ合^{つな}わせると、自ずと一つの結論が浮かび上がる。カトリックは、話を進めようとするアルベルトを遮^{さへぎ}り、口を開いた。

「ノストラダムスは、ユダヤ人なのですね。本人か、もしくは先祖の誰かが、キリスト教に改宗したのでしょう」

アルベルトは感嘆し、首を横に振る。カトリックは、先月の四日に双子の女兒を出産したばかり、しかも一人は仮死状態、もう一人は腹中で死亡し、数時間以上もそのままの状態であったため、子供の脚を切り取って出すという難産で、アルベルトが発する時には、人事不省であつた。それが先ほどから座することもせず、立ち続けている。めざましい回復に加えて、生来の勘のよさにも磨きがかかった様子であつた。感動しないわけにはいかない。